



## 【来し方…一つを見つめて】

終戦となり、東京に戻ってきた女学校は、暖房のない冬はきついという理由で休講が続いた。私は、女学校に見切りをつけ、4年で卒業して日本女子大学校（旧教育制度下の専門学校）に入学した。「女子の最高学府…社会に貢献する義務がある。」などとしばしば説教され、自分の生きる目標を真剣に考え初めて悩んだ。ところで当時、憲法、民法を始め、身近でいろいろな法律が改正され、環境が変わってきた。法律とは何か、どうやって制定されるのか、目的や趣旨は何か。私は、いつしか法制度に関心を持つようになった。法学者になろうと決心し、旧制度最後の東大法学部に入った。ある時「天の川事件」の判決に出合った。昭和25年熱海で、未登録の「天の川」饅頭を販売し周知にしたところ、同じ熱海で「天の川」の販売を始め、類似包装まで使用した業者が出た。そこで不正競争防止法に基づき仮処分を申請して成功したが、相手方は、第三者所有の不使用登録商標「銀河」を買い取り、「天の川」との類似性を主張して逆襲してきた。一旦仮処分を受けたが、東京高裁は、さすが、「権利濫用」をもって決着をつけた（昭30・6・28、高民8・5・371）。

「ブランド」、「マーク」の前身は、ギリシャ時代ともロー

マ時代ともいわれるが、資本主義の成立とともに商品取引社会において、偉大な価値を発揮してきた。商標条例は、他の知的財産法と同様、徳川鎖国約300年の遅れを取り戻し、不平



松尾 和子 (10期)


●Kazuko Matsuo

等条約からの脱却を図って制定された。しかし、大学の研究室にさえ、文献・資料はほとんどない。私は、重要であるにもかかわらず、研究の遅れている知的財産権分野を自分の専門として選び、弁護士となった。

幸い、ブランド、デザイン、発明、技術の創造物を高く評価する依頼者に恵まれ、新しい理論構成の工夫や、法改正を促す事件を担当する喜びにも恵まれた。

著名表示保護規定の導入となったポルノランドディズニー事件（健全で夢のあるレジャー施設の提供者・原告の営業が、信

用を破壊され侮辱されると主張。東京地判昭59・1・18、判時1101・110）。ホテル・リッツとゴルフ・リッツ事件（歴史を誇るリッツホテルの著名性は菓子業界にも及ぶと主張。大阪高判平11・12・16、判不競810・351）。この事件では、証人の準備のため、豪華なパリのリッツホテルに泊ることができた。しかし、神戸大震災の時、徒歩とバスを駆使して神戸地裁に辿りつく苦労もあった（その後、訴訟記録をリュックで運ぶのが習慣となった）。機能的・技術的な工具の形態が横暴な大企業に模倣された事件に勝訴したとき、依頼者が、創設者の仏前に、紅白の水引をかけた判決文を捧げる感激の一時があった（東京高判平14・5・31、判時1819・121）。今日引き続き、この会社の顧問をしている。その他、特許侵害訴訟では、損害計算鑑定人制度の利用、秘密保持命令の取得など新制度にも挑戦してきた。

音、匂い、位置商標などブランドの概念は広がっている。画像デザインの保護登録が待たれている。「企業価値を高める技術ブランディング」といった新しい言葉に首を傾げることもある。特許、技術、アイデア、デザイン、ブランドにより、事業は複合的に展開し、保護される。私の弁護士生活はまだ続きそうである。 

Hanamizuki

## 花水木

10



花の美しさに序列はない。  
この仕事をしていると、まれに感動をよぶ胸熱な人物に出会えることがある。

5月12日、私は、ビジネスパートナーの中小企業診断士に連れられて西武池袋線飯能駅に降り立った。彼によると今日の相談者は学校の先生らしい。飯能駅からタクシーで20分ほど山道をゆくと、山奥に突然校舎とグラウンドが現れた。まるで『1Q84』でふかえりが居候していた元文化人類学者戎野先生の邸宅のイメージだ。こうやって学校に行くのは十数年ぶり。初めて行ったのに、学食の匂いと体育館の古めかしさが何だか懐かしい。待ち合わせ場所の体育研究室に行くと、身体の大きい中年男性が女子生徒と話し込んでいた。どうやら悩み相談のようだ。この中年男性は、私たちに気がつくやいなや満面の笑みを浮かべ手招きをして、その女子生徒と話し込んでいるソファに私たちを座らせた。

その中年男性が、私が胸熱になった人物、「自由の森学園中学校・高等学校」体育科教諭松田和彦氏だ。

あとで学校ホームページで調べて分かったが、自由の森学園という学校は、一風変わった校風らしい。中間試験、期末試験のような定期試験はな

く、修学旅行等のイベントも全て生徒が自主的に組織する実行委員会によって計画、立案、実施されている。松田先生は、自由の森学園の体育教師、クラス担任の教師として



松田先生(写真左)と筆者(写真右)

## 西浦 善彦 (62期)

●Yoshihiko Nishiura

和太鼓、中国舞踊などの民族芸能クラブ活動を受け持ってきた。同校の民族芸能チームは、今や世界中から招聘され、フェスティバルに出場を打診されるほどの名門チームとなっている。今回の私の役割は、そのチームとユネスコ関連団体との間で新たな組織作りをするための法的サポートだ。

この学園では生徒がカリキュラムを選択し、何を学ぶかも自ら決める。生徒たちは在学中、何を夢見て何を学んで何に挫折するのかを自分で決める。

「うちの学校の体育教師に

必要なことは3つあります。①体育の授業で笛を吹かない、②生徒たちにイメージを語れる、③ともに学ぶことです。生徒たちと私たちの人間同士のやりとりに無味乾燥な笛の音は不要です。その分、生徒たちが自然と集まってくるよう言葉を尽くして語りかけ、ともに学んで人間関係を築きます。どうしても反発する生徒は抱きしめます。」

松田先生とソファで話をしている時、生徒らしき男女3人が体育研究室にやってきた。どうやら生徒ではなく学園の卒業生だそうだ。3人は海外留学する直前に「まっちゃん」に会いにきたらしい。ソファの新メンバーたちが、物怖じせず、まっすぐ将来を見つめ、アグレッシブに行動しようとする姿に触れ、「まっちゃん」は満面の笑みだ。そして、そんな「まっちゃん」の姿を教育実習生の大学生が熱心に観察している。

山奥の学校の体育館の2階にある狭い体育研究室に、「まっちゃん」を慕う生徒や卒業生がどんどん集まってくる。Facebookの「いいね!」を1人で100回押したいくらいだ。

私は、今、1日1日が楽しくて仕方ない。こんな人たちに出会えるのだから。弁護士6年目、そんなたまらない日々を送っている。 ■